

恋情は  
仮面の下に

早瀬響子

*Kiyoko Hayase*

Illustration

巴里

*Sato Tomoe*



恋情は仮面の下に

《立読み版》

早瀬 響子

イラスト 巴 里

「王宮前の市民たちを早く誘導しろ、広場があふれそうになっているぞ！」

「各国大使の席の準備は整っているか！ マスコミ関係はまとめて前庭へ……」

「大広間の花が足りないですって!? 今頃何を言っているの！」

——その朝、エリシア王国の王宮は久しぶりの活気に満ちあふれていた。

エリシアは東欧の内陸部に位置する、広大な領土と古い歴史を持つ君主国である。今日はその首都コ  
ンスタンツァで、現国王ニコライが病から回復した祝いの式典が開かれるのだ。

その式典では国王が、久しぶりに王宮のバルコニーから国民へ挨拶あいさつすることも予定されていた。その  
光景を一目見ようと、近隣の国々だけでなく、古くからの友好国である日本にほんからも祝いの使者やマス  
コミがやって来ている。

「——おお、これは先生、おはようございます！」

「おはようございます、皆さんお忙しそうですね」

その王宮中の賑にぎわいを聞きながら、篠原怜はいつものように清潔な白衣に身を包み、磨き上げられた

大理石の廊下を急いでいた。

晩秋の朝の日差しが、天井まで届く大きな窓から斜めに射し込んでくる。反対側の壁には、今日の式典のため、花飾りとともに深紅のビロードの緞帳どんちようが掛け巡らされていた。そこには眠る龍とそれを囲む葡萄ぶどうの蔓つるというエリシア王家の紋章が金糸で刺繡ししゆうされ、光を受けてきらきら輝いている。

「これから陛下へいかの診察にいらっしゃるのですか？ 昨夜は式典のご準備で遅くなられましたが、そろそろお目覚めでしょう」

「お休みの時もお機嫌よく、先生のおかげでぐっすりお眠りになられたようです。今日の国民への挨拶をそれは楽しみにしておいででしたよ」

「そうですか。昨日からお薬を軽いものに変えたのですが、大丈夫そうなのでよかったです」

「あのう先生、この間ご相談しました妻のことなんです……。本当に私らでも、診察していただけるんでしょうか……？」

「そんな、かしこまらないでください。もちろんですよ、奥様は病院まで来られますか？」

「はい！ 必ず連れて参ります！ ありがとうございます、本当にありがとうございます！」

この半年ですっかり親しくなった廷臣ていしんや女官じよかん、そして衛兵たちが、準備で忙しく行き交いながらも嬉

しそうに声をかけてくる。それに笑顔で一つ一つ答えながら、怜は王宮裏手の小さなホールに出た。ここから王が静養している離宮へ、庭を横切って回廊が繋がっているのだ。その周囲は薔薇園ばらになっていて、色とりどりの冬薔薇が咲き始めている。

その時、

「——すっかり人気者だな、レイ」

背後からの声に、どきんっ、とした。急いでさり気ない笑みを浮かべ、振り返る。

「アレクサンドル殿下、……!!」

とたん、心臓がさらに跳ね上がり、早鐘のように打ち始めるのがはっきりと感じられた。

エリシア王国の第一王子、アレクサンドルがそこに立っていた。緑色の切れ長な瞳をわずかに細め、微笑ほほえんでこちらを見ている。すつきりと短めに整えられた金髪に、高く通った鼻梁びりょう、引き締まった唇と、端正な面差あこのだが、やや顎の張った輪郭りんかくと日焼けした肌、百九十センチを超える長身、そしてギリシア彫刻のように精悍せいかんな身体つきが男性的で力強い印象を与えている。

何故か、初対面の時からずっと、怜はこの自分と同じ二十八歳の王子に会うたびにこんなふうになってしまうのだが、今日の彼はさらに素敵だった。これから始まる式典のため、普段の仕立てのいいスー

ツではなく、目もくらむような凛々しい礼装姿だったからだ。

エリシアは尚武しょうぶの国なので、その礼装は軍服形式である。上衣は黒の詰め襟で、胸の部分に金糸で見事な刺繍がほどこされ、同じ色の飾り紐ひもと肩章がつけられている。その上から短めの、深紅のビロードのケープをふわりと羽織り、黒の細身のズボンに、かかとのある黒のショートブーツを履はき、美しい寶石のはめ込まれた紋章入りの短剣を腰に帯びる。これはエリシア王家の略式礼装だが、アレクサンドルの容姿をさらに際立たせ、まるで彼のために特別にデザインされたかのようにだった。

「殿下はよしてくれ、アレックでいいと言ったろう」

自分の反応に戸惑いながらも、まるでおとぎ話の王子様そのものだ、いや彼は正真正銘の王子様なのだけれど……などと、ついうつとり見とれてしまった怜は、笑顔で言われてわれに返った。努つとめて気を取り直し、平静な声で答える。決してその名を呼ぶつもりはなかった。

「……陛下に、朝のご挨拶にいらっしゃるのですか？ いつもよりお早いのですね」

「ああ。式典の打ち合わせがあるから、早く来いとの仰おほせだ。昨夜から張り切っおていてな。それにしても父上が、元氣になられたとたん、この話を持ちかけてきた時には驚いたのだが……」

その言葉に、怜は周囲に人影がないのを確かめ、微笑んで頭を下げた。

「この度は第二王位継承者になられる由、まことにおめでとうございます、殿下」

まだ王家の人間たちと、主治医である怜しか知らないが、国王は今日の式典で、そのことを全ての廷臣と国民の前で発表する予定なのだ。

「いや、急な話で私も戸惑っているよ。ミハイルはあまり喜んでいなかったようだし、何より叔父上のグレゴリー公が、すんなり了承したのが逆に気になってな」

アレクサンドルは手を振って苦笑し、それから心配そうな顔になった。

「そういえばレイ、そろそろ君も着替えて支度をした方がいいのではないか。昨日のうちに礼服を用意するよう、小姓のクリスに伝えておいた筈なのだが」

「あ、いいえ。いつものように陛下のご様子を窺ってからと考えておりました。それに、そもそも私などが、本当に王族方のお席にご一緒してよろしいのでしょうか……」

昨日、怜はニコライ国王に、明日の式典では是非とも自分や息子たちと並んで国民に挨拶してほしい、と頼まれたのだ。慌てて辞退したのだが、アレクサンドルも廷臣たちも大賛成し、それが決まってしまうのである。

「まだそんなことを言っているのか。一時は命も危なかった父上が、ここまで回復出来たのは全てレイ

のおかげじゃないか。そもそも君が手術を強く進言してくれたのだろう。——後でイヴァン公から聞いたのだが、そのおかげで動揺していた国民も大分落ち着いたようだし、もう君のことはエリシア中の人々が世界一の名医だと認めている。おまけに今は病院で、一般の患者たちも診てくれて……皆、君にはどんなに感謝してもきれない気持ちでいるよ」

「いいえ、殿下がお口添えしてくださいさなければ、とても私一人ではあそこまで出来ませんでした。それに、どんな時でも患者を助けるのは医師として当然の努めです」

きっぱりと首を振る。心からそう思うからだ。

——怜の恩師で、世界的にも高名な外科医である松崎医師のもとに、エリシア政府から当時重篤だったニコライ国王を診察してほしいという報告が届いたのは、七ヶ月ほど前のことだった。だがエリシアに留学経験があり、国王と親交のあった松崎も、ちょうど高齢のため入院していたのだ。それで彼は代理として、弟子たちの中でも最も優秀な怜を指名し、この国に派遣したのだった。

意を受けた怜は到着すると直ちに国王を診察し、一刻も早く手術を行うべきと決断、その執刀を強く主張した。けれど年若い怜に対し、世継ぎのミハイル皇太子や、国王の弟であるグレゴリー公は見下した態度を隠そうともせず、言葉もろくに聞かず退けようとしたのだ。

王に次ぐ権力を持つ二人の言葉に誰も逆らえなかったその時、ただ一人自分を支持してくれたのがアレクサンドルだったのである。

『——このままでは父は決して助かりません。それならば手術を行うべきです。シノハラ先生は名医マツザキ先生の全面的な信頼を得ていらつしやいますし、我が国の医学は現実として日本や他の国よりもはるかに遅れ、医師自体も不足しています。』

国王として何度もこの国の危機を乗り越えてきた父も、意識があればそう言った筈です。それにシノハラ先生を若輩者じやくはいものだというのなら、皇太子殿下、同じ年の私やあなたもそうではないですか？』

『……!』

それまで、誰に対しても穏やかで、控えめな態度だったアレクサンドルの言葉に、恰はまず呆然とし、それから感謝とともに思わず賛嘆さんたんの眼差しを向けていた。廷臣たちも賛成の声を上げかけたが、当のミハイルは侮辱に感じたようで、真っ赤になった。

『な、な、なんだお前、生意気な……!』

『皇太子のおっしゃるとおりだ。長い間エリシアにもいなかった庶子しよこごときに何がわかる!』

さらに、グレゴリーが軽蔑しきった口調でそう言い、今度はアレクサンドルが怒りに頬を紅潮ほおさせた。

だが彼は怯むひびことなく二人の言葉と視線を受け止め、一瞬、眠る国王を挟み緊張が走った。

だがその直後、意識を取り戻したニコライ国王が同意してくれて、怜は幸い、手術を行うことが出来た。その結果、王は一命を取り留めたのだ……。

——と、アレクサンドルは声を上げて笑った。

「本当に、日本人は謙虚なんだな。だけどレイ、君が出席してくれないと皆がっかりしてしまうよ。さつきも大広間で女官たちが、遠い東の国から来た美しい先生が礼服に着替えたら、どんなに素敵だろうと大騒ぎしていたからね」

「えっ……？」

不思議そうな顔をした怜に、アレクサンドルは、驚いたようにこちらを見た。

「なんだ、やはり君は自分が人にどう見えるのかわかってないのか？ こんなに綺麗なのに……」

聞いたとたん、怜は頬が染まるのを感じ、ついうつぶむいてしまった。

自分の容姿について、あまり深く考えたことはない。どちらかというところコンプレックスを感じていた。

背は百七十八センチとそれなりに長身だし、筋肉もついているのだが、体質のせいなのかほっそりとし

た身体つきで、特に精悍なアレクサンドルと並ぶと、その差が歴然である。顔立ちは小さな卵形の輪郭に、漆黒の髪と黒目がちな大きな瞳、それに高く細い鼻筋のせいで、男にしては線が細すぎると自覚していた。しかも色白のせいも、余計にそれが際立ってしまう。幸い眉は細いがくつきりしていて、それと口元が小さく引き締まっているので、かろうじて柔弱ではないと思うけれど、医師としては頼りなく見え、患者たちを不安にさせているのではないかと気になっていた。

なのにどうして、彼にそう言われてドキドキしてしまうのだろう。女性でもないのに……。

「そんな、困った顔をしないでくれ……」

前より低い、真剣そうなアレクサンドルの声が耳に届いた。怜は恥ずかしくなった。不自然な態度で彼を戸惑わせてしまったのだ。

——何を意識しているのだ。これは普通のことだ。こちらの人たちは、日本人よりもずっと気軽に容姿について誉めたりするのだから。ほら、彼だってなんとも思っていないじゃないか……——

自分に言い聞かせ、顔を上げる。とたん、呼吸が止まってしまった。

予想に反してアレクサンドルはまだじっと、こちらを見つめたままだったのだ。

どうして、と思うより早く、怜は彼の瞳に見とれてしまっていた。日本人には決して見られない鮮やかなエメラルド色の瞳の中に、小さく小さく自分の姿が映り込んでいる。

こんなに間近で彼を見たのは初めてだった。

——なんて、綺麗な瞳だろう……——

まるで呪縛されたように視線が逸そらせない。その中に閉じ込められたような錯覚おちいに陥る。彼の瞳だけでなく額にかかる金の髪や肌、そしてかすかに感じる香り、それら全てに魅了おちいされてしまう。

きつと、騒がれているのはアレクサンドルの方だ、と思った。ついさつき、花飾りを持った若い女官たちが挨拶しながら通り過ぎた時、皆、こちらを見て頬を染めてはしゃいでいたのだから。こんなに素敵な彼を見ればそれも当然だ……。

ごく自然にそこまで考えて、はっとした。

——何をしているんだ、俺は。彼の前でポーツと突っ立って……！——

「——殿下、……」

気を取り直そうとし、それに息苦しさにも耐えかねて急いで会話を続けようとした。けれど上手うまくいかず、唇がわずかに開いただけだった。

とたん、アレクサンドルの視線がもつと強く、食い入るようなものに変わった。

「アレックでいい、と言っただろう……？」

こちらを見つめたまま彼は言った。声はさらに低く、囁くささやくようなものになっていた。



ふいに彼の右手が視界に入ったかと思うと、ためらいがちに頬に伸びてくる。怜はそれをただ呆然と見つめていた。

そして肌にその温もりを感じた時、

「——おい、アレクサンドル！」

苛立<sup>いらだ</sup>たしげな声が響き、二人ははつと振り返った。

ホールから回廊に続く扉のところに、ミハイル王子が息を弾ませて立っていたのだ。薔薇園を通って来たらしい。兄と同じ礼装姿だが、その指には皇太子の印である金の指輪が光っていた。エリシアでは第一王位継承者、つまり皇太子が金の指輪を、そして第二王位継承者がそっくり同じデザインの銀の指輪をつけるのである。その表面にはエリシア王家の紋章とともに、身につける者の名がそれぞれ刻み込まれているのだ。

「……！」

怜は大急ぎで身を離れた。ミハイルは兄と同じ緑色の瞳でこちらを睨<sup>にら</sup>んでいる。今の様子を見られたかと心配になったが、アレクサンドルが庇<sup>かば</sup>うように前に進み出た。

「どうしたのですか、皇太子殿下。そんなところから……」

「大事な話があるのだ。離宮で話したい」

ミハイルは視線を逸らし、いつものように敬語で話しかける兄を早口でさえぎった。

ふと怜は眉をひそめた。普段兄の前では威張<sup>いば</sup>った態度のミハイルが、今日はずいぶんと落ち着かない様子だ。それにいつもそばにいるグレゴリーの姿がない。

——そういえば最近、彼はひどく苛立って、女官や小姓たちを怒鳴りつけていたけれど……——

「それは、かまいませんが……」

アレクサンドルも戸惑ったようで、氣遣うように怜を振り向いた。

「あの、私はもう少し後から参りましょうか」

「ありがとう、そうしてくれ」

怜が言うと、彼はすまなそうに笑みを浮かべ、きびすを返した。肩のケープが優雅に揺れる。

ミハイルがもどかしげな仕草でついてくるように促<sup>うなが</sup>し、二人の王子は並んで回廊を歩き出した。

「……」

その後ろ姿を見送り、怜は聞こえないようにごく小さなため息をついた。

エリシアに来る前から事情は聞いていたが、彼らに会うたび皮肉を感じずにはいられない。

アレクサンドルとミハイルは、髪や瞳の色、声、そして背格好までがそっくりだった。廷臣たちでも、片方だけに出会ったらどちらなのか見分けがつかないほどだったのだ。だが怜は二人を見間違えたことは一度もなかった。

二人は、異母兄弟である。生まれたのもわずかに数ヶ月違いで、アレクサンドルの方が兄なのだが、母親は国王の愛人で、庶子として生を受けた。一方弟のミハイルは王妃の息子だった。そしてこの国では、庶子は王族ではあっても一段低い立場と見なされ、王位継承権も後回しにされるのだ。

アレクサンドルは現在、ミハイルと王弟グレゴリーに次ぐ第三王位継承者なのである。

古代ローマから続く古い国家であるエリシアは、冷戦の時代さえ、東西どちらの陣営にも距離を置き、独自の国策と軍事力で独立を保ってきた君主国だった。そのため、国内の政争を避ける意味でも建国以来この掟おきてが守られているのだ。したがって国王の第一子でありながら、アレクサンドルはずっと王冠から遠い存在だった。

だがそれも、今日で変わる。

長い病やまひから回復したニコライ国王は、思うところがあったらしく、以前から専横な行いの多かった弟グレゴリーに代わり、王命によって息子のアレクサンドルを第二王位継承者と認め、これからはミハイ

ル皇太子の補佐役とする、と決めたのだった。国王はすでにそのための公式な文書を用意し、グレゴリーから銀の指輪を返還させ、至急でアレクサンドルの名を刻んだものに作り直させていた。今日、全ての廷臣たちと国民の前でそれが発表される。そしてアレクサンドルには、その立場に相応しい地位が準備されるのだ。

そうなれば、彼は今以上に遠い存在になってしまおうだろう……。

——ふいに切ない気持ちがかみ上げてきて、怜はそつと辺りを見回すと、その名を呼んでみた。

「アレック……」

とたん、今度ははっきりと胸に痛みが走り、慌てて手をあてがった。同時に頬が上気するのがわかる。

「……!!」

そう眩まよただけでこうなってしまうなんて、一体どうしてしまったのだろう。だから不審がられて彼に迷惑をかけないよう、一人きりの時以外は、決してその名を呼ばないようにしているのに。

けれどそうしたことで、たった今見たばかりの彼の凛々しい礼装姿と、間近でこちらを見つめた綺麗な瞳が思い浮かび、怜は胸が強く脈打つのを感じてしまった。それは、彼に初めて会ってから幾度となくわき起こってきた思いだった。

——まさか……——

怜は慌ててかぶりを振った。そんな筈はないと必死に言い聞かせる。その思いがこみ上げることに、ずっとしてきたことだ。

自分が男を愛するなんて絶対にあり得えない。二十八年生きてきて、そんなことは一度もなかったのだから。たとえアレクサンドルがどんなに魅力的で、凛々しくて、しかも誠実で優しい男だったとしても。

——第一そんなことになったら、アレクサンドルがどんなに……——

「——レイ！」

いきなり呼ばれて、怜ははっとわれに返った。

「イヴァン？ どうしたんだ。まだそんな格好で……市民軍のみんなと一緒にだったのか？」

長身の青年がホールに入ってきたのを見て、急いで笑みを浮かべる。

イヴァン・ゴドノフは、一年前に亡くなった父のあとを継いで公爵（こうしやく）になったばかりの二十五歳の青年である。エリシアでも最も古い貴族の嫡男で、彫りの深い、顎が少し尖った（とが）ハンサムな顔立ちなのだが、つり上がり気味の眉と大きな灰色の瞳のせいか、きかん気の少年のようである。燃え立つような赤毛を

長めに伸ばし、無雑作にくくった姿と、白いシャツに黒のズボンだけの服装が、その印象をさらに強めていた。

背は王子たちよりさらに少し高く、手足もすらりと長い。身体つきはやや細身で、片方の手には包帯が巻かれている。

「アレクサンドルのことを考えていたんだろ。レイ！」

「君、またそんなこと……」

問いかけを無視し、大股で近寄って来たイヴァンに、怜は笑顔で手を振ったが、

「聞こえませ。あいつの名前をこっそり呼んだ後、あんたすごく辛こそういな顔して胸を押さえてた」  
「……!!」

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

恋情は仮面の下に

《立読み版》

発行日 2011年6月23日

著者名 早瀬 響子

イラスト 巴 里

発行所 【MILK-CROWN】

株式会社水晶院

<http://www.milk-crown.net/>

(C) Kyoko Hayase 2011

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。